

清代八股文における破題・承題の 作成法について (2)

On the “Opening the Topic” and “Receiving the Topic” Sections
of the Eight-Legged Essay (2)

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

(iv) 『夢雲軒管見録』

浙江山陰の張商霖の同治十年（一八七一）刊『夢雲軒管見録』（各頁の柱と封面とは『雲路指南』とする：道光二十一年（一八四一）湯金釗序）は、破題をつぎのように説明する。

[破題法] 破題とは、是れ題中の字と意とを説くなり。[そして以下のように] 謂う。題 整うものは、破く^とに之を分か^つを以てす、題 晦きものは、破く^とに之を明らかにするを以てす。[それは] 二句もて止まると爲すに過ぎず。務めて渾括（概括的）清醒（明晰）・確切にして移らざるを要す。其の法に明破・暗破・順破・逆破・分破・總破・對破・正破等の式有り。間に反破を用いる者有るも、[これは] 成才（有能な人）にして方^{はじ}めて之を用う可し。初學は宜しく輕がろしく^{なら}効うべからず。又た上句もて章旨を顧み、下句もて本題を破く有り・上句もて本題を破き、下句もて章旨に^{したが}跟着有り・上句もて全章を冒（総括）し、下句もて本題を破く有り・上句もて本題を破き、下句もて或いは下を吸（含ませる）す、或いは直斷す、或いは虛托する有り、又た兩句もて連珠の下を貫くが如き者有り・兩句もて連環廻轉して相い抱くが如き者有り。總じて題目の何如なるかを看るのみ。三句を以て破題と爲す有るに至る者は、乃ち是れ變格たり。殊に必ずしも作らず（『夢雲軒管見録』卷五・逐條啟蒙・破題法・一葉）。

破題とは、題目の文字と意味とを解き明かすものである。題目の内容がはっきりと整ったものであるならば、分析して解き明かせばよい。題目の内容がはっきりしないものであるならば、それをはっきりさせて解き明かせばよい。破題は、二句で止める。つとめて概括的・明晰であり適切できっちりしたものにすることが要求される。句法には、明破・暗破・順破・逆破・分破・總破・對破・正破などがある。反破を用いる者もいるが、能力がある人向きであり、初学者は簡単に用いないほうがよい。さらに、上句で題目を含む章全体を考慮し、下句で本題を解くもの・上句で本題を解き、下句で題目を含む章全体の意味に及ぶもの・上句で題目を含む章全体を総括し、下句で本題を解くもの・上句で本題を解き、下句で出題されない後文（下の部分）を含ませるもの、または下句でただちに断定するもの、または仮託するもの・両句で連なった珠を貫くようにするもの・両句で連なった環を回転させるように抱くようにするものなどがある。つまりは題目からどのような解法を用いるか考えるのである。三句で破題を作るのは、規定外のものとなる。

つづけて、虚字の使い方にもふれる。

凡そ破題の上句は歇語字を用いず。間に「焉」字・「也」字を用いる者は、亦た習見（常見）せず。下句の歇語の「也」字・「焉」字・「矣」字・「者也」字・「者焉」字・「者矣」字・「而已」字の如きは、俱に之を用いる可し。「乎」・「哉」・「耶」・「歟」等の字の若きは、斷じて用う可からず。間に歇語辭を用いざる有る者は、亦た變格なり（『夢雲軒管見錄』卷五・一葉～二葉・逐條啟蒙・「破題法」条）。

上句には末尾の虚字を用いない。文中に「焉」・「也」の文字を用いるものは、ふつうには見ないものである。下句では、「也」・「焉」・「矣」・「者也」・「者焉」・「者矣」・「而已」などの文字を用いる。ただし、「乎」・「哉」・「耶」・「歟」などの文字は決して用いてはいけない。文中に歇語辭を用いるのは規格外である。

(v) 『童子問路』

鄭之琮の『童子問路』(光緒六年(一八八〇)新鐫)は、破題をつぎのように説明する。

破題とは、題中の字と意とを破説するなり。題 整えて分拆(分離)して之を言うは、物を整え之をして破かしむが如し、故に之を破題と謂う。其の式 兩句にして止まるに過ぎず。大要は意を破くを以て上と為す。[題目の] 字を破くは之に次す。題の全てを將^もって述べるは則ち罵題と爲す。其の法に明破・暗破・分破・合破・順破・逆破・正破有り。或いは上句もて意を破き、下句もて字を破く・上句もて字を破き、下句もて意を破くあり。或いは首句もて本題を破き、次句もて一句を足らすあり。首句もて全章・全節を冒(総括)し、次句もて本題に扣(触れる)あり。首句もて題面を破き、次句もて上文を我^{ママ}(找:補足)するあり。首句もて下文を透^{とお}し、次句もて本面を破くあり。首句もて本題を破き、次句もて下文を吸(含ませる)すあり。總じて相題を貴びて之を爲すのみ (浙蘭文華堂藏版『童子問路』卷一・二十二葉・「破題式」条)。

破題とは、題目の文字と意味とを解き明かすものである。題目を整えて分離して言うのは、物を整えて解き明かすようなものである。だから「破題」という。破題の形式は、二句でとどまらせるだけである。大要は、題目の意味を解き明かすのが最もよく、題目の文字を解き明かすのは、それに続く。題目のすべて述べれば、「罵題」となる。句法には、明破・暗破・分破・合破・順破・逆破・正破がある。さらに、上句で題目の意味を解き、下句で題目の文字を解くもの・上句で題目の文字を解き、下句で題目の意味を解くものがあり、また上句で本題を解き、下句で全体を補足説明するもの・上句で題目を含む章や句全体を総括し、下句で本題に触れるもの・上句で題面を解き、下句で出題されない上文(上の部分)を補足するもの・上句で出題されない後文(下の部分)まで通して解き、下句で本面を解くもの・上句で本題を解き、下句で出題されない後文(下の部

分) を含ませるものがある。要するに題目をよく見ることが大切なのである。

そして、末尾の虚字については、「焉」字・「也」字・「已」字・「矣」字・「而已」字・「者也」字を用いるが、それ以外は使ってはいけない、とする。

煞脚の字に至りては、止だ「焉」字・「也」字・「已」字・「矣」字・「而已」字・「者也」字を用う可し。其の他は皆な用いる能わず(浙蘭文華堂藏版『童子問路』卷一・二十二葉・「破題式」条)。

[用例] 『増註童子問路』(浙蘭文華堂藏版) を用いる

題目：不亦説乎(『論語』學而)

學有説心之境，時習者尙自得之也(學に心を説ばすの境有り，時に習う者は尙お之を自得するなり)

[上句:] 「説」字を明破す。[下句:] 上に^{したが}跟いて，「不亦説乎」の神を^と破く(『増註童子問路』・二十三葉・「破題」条)。

題目：人不知而不愠(『論語』學而)

學非求名，不必愠人之不知也(學は名を求むるに非ざれば，必ずしも人の知らざるを愠らざるなり)

[上句:] 意を^と破く。[下句:] 題面を破く(『増註童子問路』卷一・二十三葉・「破題」条)。

題目：本立而道生(『論語』學而)

知道所由，生則知本之當務已(道の由る所を知り，生じて則ち本の當に務むべきを知る)

[上句:] 「道生」を倒破す。[下句:] 「本立」を分破す(『増註童子問路』卷一・二十三葉・「破題」条)。

題目：巧言（『論語』學而）

言而巧也，心馳於言矣（言いて巧なるや，心 言に馳す）

〔上句：〕 合せて題面を破く。〔下句：〕 正に下意を含む（『増註童子問路』
卷一・二十三葉・「破題」条）。

題目：爲人謀而不忠乎（『論語』學而）

大賢視人猶身，恆慮有未盡之心焉（大賢は人を視ること猶お身のごとくし，
恆に未だ盡さざるの心有るを慮る）

〔上句：〕 「人」字並びに「身」字を破く。〔下句：〕 「忠」字，並びに「不」
字を暗破す（『増註童子問路』卷一・二十三葉・「破題」条）。

題目：道千乗之國（『論語』學而）

道國有要，可進詳其實也（國を道^{おさ}むるに要有り，其の實を進め詳しくす可きなり）

〔上句：〕 題面を破く。〔下句：〕 下意を破く（『増註童子問路』卷一・
二十三葉・「破題」条）。

題目：弟子入則孝（『論語』學而）

教弟子以孝，于入而克盡焉（弟子に教うるに孝を以てし，入るに于いて克く
盡す）

〔上句：〕 分破す。〔下句：〕 「則」字の意なり（『増註童子問路』卷一・
二十三葉・「破題」条）。

題目：謹而信（『論語』學而）

教弟子以謹信言行，其交修矣（弟子に教うるに「謹」・「信」の言行を以てす
るは，其の交ごも修むればなり）

〔上句：〕 明破す。〔下句：〕 「而」字の意なり（『増註童子問路』卷一・
二十三葉・「破題」条）。

題目：而親信^{ママ}（仁）（『論語』學而）

仁在衆中親之，更不容已也（仁 衆中に在りて之に親しむは，更に已む容^ベからざればなり）

〔上句：〕先ず「仁」字を破く。〔下句：〕後に「親」字を破く（『増註童子問路』卷一・二十三葉・「破題」条）。

題目：事父母能竭其力（『論語』學而）

誠於事親者，不自有其力也（親に事うるに誠にする者は，[必ずしも] 自から其の〔学ぶという〕力を有せざるなり）

〔上句：〕^①註に照らして「事父母」を明破す。〔下句：〕「竭」字を暗破す（『増註童子問路』卷一・二十四葉・「破題」条）。

①『論語集注』學而「子夏曰，賢賢易色，事父母能竭其力……」条の朱注に「四者（賢賢・事父母・事君・與朋友）は皆人倫の大なる者にして，之を行ないて必ず其の誠を盡す。學は是の如きを求むるのみ」。

題目：事君能致其身（『論語』學而）

致身以事君，其能亦不易也（身を致して以て君に事う，其の能 亦た易からざるなり）

〔上句・下句：〕倒破の法なり（『増註童子問路』卷一・二十四葉・「破題」条）。

題目：則不威（『論語』學而）

無威可畏，知質之宜重矣（威の畏る可き無くして，[そうして] 質（質幹：本体）の宜しく重んずべきを知る）

〔上句：〕明破す。〔下句：〕上の「重」字を我^{ママ}（找：補足）す（『増註童子問路』卷一・二十四葉・「破題」条）。

題目：主忠信（『論語』學而）

自修莫要於存誠，學之本又立矣（自修は誠を存するよりも要するもの莫しとせば，學の本 又た立てり）

〔上句：〕脈に跟（したが）いて題面を暗破す。〔下句：〕題意を我（找^{ママ}：補足）す（『増註童子問路』卷一・二十四葉・「破題」条）。

題目：過則勿憚改（『論語』學而）

勉君子之改過，自修之道全矣（君子 過ちを改むるに勉めば，自修の道 全す）

〔上句：〕題面なり。〔下句：〕題意なり（『増註童子問路』卷一・二十四葉・「破題」条）。

題目：民德歸厚矣（『論語』學而）

民之歸厚，上有以感之也（民の厚きに歸すは，上 以て之を感じしむること有ればなり）

〔上句：〕題面なり。〔下句：〕上を挽く（『増註童子問路』卷一・二十四葉・「破題」条）。

題目：言可復也（『論語』學而）

難必其復者可復，惟其言之近義也（必ず其の復^ふむ者を難^{かた}しとして復^ふむ可きは，惟だ其の言の義に近ければなり）

〔上句：〕題面を倒破す。〔下句：〕意を找（補足）して上を挽く（『増註童子問路』卷一・二十四葉・「破題」条）。

題目：君子食無求飽（『論語』學而）

君子無求飽之心，志不在食也（君子 飽くを求むの心無きは，志 食に在らざればなり）

〔上句：〕題面なり。〔下句：なし〕（『増註童子問路』卷一・二十四葉・「破

題」条)。

題目：而慎於言（『論語』學而）

言易於事，君子之所慎也（言は事え^{やす}易ければ，君子の慎しむ所なり）

〔上句・下句：「事」字に借りて相●（一字不明）し，「而」字の意を得（『増註童子問路』卷一・二十四葉・「破題」条）。

題目：就有道而正焉（『論語』學而）

君子不敢自待，故於有道是正焉（君子 敢て自から待たず，故に有道に於いて是れ正し）

〔上句：〕題面なり。〔下句：〕題意なり（『増註童子問路』卷一・二十五葉・「破題」条）。

題目：吾十有五（『論語』爲政）

聖人以身立教，因先邇乎幼時焉（聖人 身を以て教を立つるに，因りて先ず幼時に邇る）

〔上句：〕通章を冒（総括）し，「吾」字を暗破す。〔下句：〕本位に扣（触れる）す（『増註童子問路』卷一・二十五葉・「破題」条）。

題目：不違如愚（『論語』爲政）

善受聖教者，其象可想見焉（善く聖教を受くる者は，其の象 想見す可し）

〔上句：〕上截を暗破す。〔下句：〕下截の意を暗破す（『増註童子問路』卷一・二十五葉・「破題」条）。

題目：亦足以發（『論語』爲政）

大賢之足發，聖人所深幸焉（大賢の發するに足るは，聖人の深く幸とする所なり）

[上句:] 題面なり。 [下句:] 意なり (『増註童子問路』 卷一・二十五葉・「破題」条)。

題目: 我愛其禮 (『論語』 八佾)

聖人之心、惟知有禮而已 (聖人の心は、惟だ禮有るを知るのみ)

[上句:] 「我愛」を暗破す。 [下句:] 「禮」字を破く (『増註童子問路』 卷一・二十五葉・「破題」条)。

題目: 而恥惡衣惡食者 (『論語』 里仁)

恥非所恥、衣食中人而已 (恥ずる所に非ざるを恥ずるは、衣食する中の人なるのみ)

[上句:] 合せて題面を破く。 [下句:] 題意を破き、下を注す (『増註童子問路』 卷一・二十五葉・「破題」条)。

題目: 父母之年 (『論語』 里仁)

計親之年、爲人子切言之也 (親の年を計るは、人の子と爲りて之を切言すればなり)

[上句:] 題面なり。 [下句:] 題意なり (『増註童子問路』 卷一・二十五葉・「破題」条)。

題目: 邦有道不廢 (『論語』 公冶長)

邦而有道、君子道長矣 (邦に道有れば、君子の道 長しえなり)

[上句:] 題面なり。 下句:] 題意なり (『増註童子問路』 卷一・二十五葉・「破題」条)。

題目: ^{ママ}瑚 (珊) 璉也 (『論語』 公冶長)

器兼二代、品高千古矣 (器 二代を兼ね、品 千古より高し)

〔上句・下句:なし〕(『増註童子問路』卷一・二十五葉・「破題」条)。

題目:其養民也惠(『論語』公治長)

以惠養民,愛人之君子也(惠を以て民を養うは,人を愛するの君子なり)

〔上句・下句:なし〕(『増註童子問路』卷一・二十六葉・「破題」条)。

題目:則又曰(『論語』公治長)

齊臣復有後,言情不容於終默也(齊の臣に復た後〔の言葉が〕有り,情を言
いて終に黙る容^べからざればなり)

〔上句・下句:なし〕(『増註童子問路』卷一・二十六葉・「破題」条)。

題目:不如丘之好學也(『論語』公治長)

聖人望人好學,而以已勵天下焉(聖人は人の好學を望み,己を以て天下を勵
ます)

〔上句:]題意を破く。〔下句:]題面を破く(『増註童子問路』卷一・二十六葉・
「破題」条)。

題目:居敬而行簡 二句(『論語』雍也)

大賢論臨民之道,有善於簡者也(大賢 臨民に臨むの道を論じて,簡に善な
る者有るなり)

〔上句:]下句を破くに到る。〔下句:]上句を破きて,下に対す(『増註童
子問路』卷一・二十六葉・「破題」条)。

題目:將入門(『論語』雍也)

全師以入國,可爲殿者幸矣(師を全うして以て國に入るは,殿なる者の幸と
爲す可し)

〔上句・下句:なし〕(『増註童子問路』卷一・二十六葉・「破題」条)。

題目：富而可求也（『論語』述而）

欲返求富者之心，不妨姑言其可也（富を求める者の心を返さんと欲し，姑らく其の可なるを言うを妨げざるなり）

[上句:] 題意を渾破す。[下句:] 題位に虚扣（触れる）す（『増註童子問路』卷一・二十六葉・「破題」条）。

題目：浴乎沂（『論語』先進）

志在流水，其志潔矣（志 流水に在りて，其の志は潔し）

[上句・下句:] なし（『増註童子問路』卷一・二十六葉・「破題」条）。

題目：君子而時中（『中庸』第二章）

與時偕行，中庸屬之君子（時と偕に行くは，中庸 之れを君子に屬すればなり）

[上句:] 一截を倒破す。[下句:] 上截を我（找：補足）す（『増註童子問路』卷一・二十六葉・「破題」条）。

題目：大孝終身慕父母（『孟子』萬章上）

大孝之慕親，終身一孩提也（大孝の親を慕うは，終身 一の孩提なればなり）

[上句:] 合せて題面を破く。[下句:] 運びて題意を我（找：補足）す（『増註童子問路』卷一・二十六葉・「破題」条）。

(vi) 『小題文模標準』

王玉藻（字は輝亭，号は拙齋）の『小題文模標準』（光緒九年（一八八三）新鐫）は，つぎのようにいう。

破題は一篇の主と爲す。須らく意思有るべし。祇だに題面を破く可からず。一句もて題面を破き，一句もて題意を破く者有り。兩句もて俱に題面を破き，題意は即ち其の中に寓する者有り。明破なる者有り。暗破なる者有り。

反破なる者有り。正破なる者有り。[題目の]脈の上文に在りて上に跟(したが)いて破く者有り。[題目の]脈の下文に在りて下に對して破く者有り。種種にして一ならず。總じて題意を破清し、能く通篇の主を立てるを要す(『小題文模標準』卷一・一葉・「破承題論」条)。

破題は、全体の主要な部分である。意図を込めなければならない。ただ、題面を説明するだけではいけない。一句で題面を解き、次の一句で題意を解くものがある。上下の二句で題面を解き、題意はそのなかに寓するものがある。明破・暗破・反破・正破がある。題目の要点が上にあると、その上の部分にしたがつて解いてゆくものがある。題目の要点が下にあると、その下の部分にしたがつて解いてゆくものがある。このように様々であり、ひとつではない。要するに題意をすっきりと解き、題目をふくむ章全体の意味するところをはっきりさせることが大切なのである。

[用例]

『小題文模標準』にある用例は、承題とひとつになっている。そこで、用例については、「承題」の『小題文模標準』条で検討したい。

(vii) 『蒔花小築牖蒙草』

江峯青(字は湘嵐。安徽婺源の人。光緒十二年丙戌科(一八八六)三甲五十三名の進士)の『蒔花小築牖蒙草』(光緒十九年(一八九三)刻:光緒十八年(一八九二)自序)は、つぎのようにいう。

題目は數字に過ぎざるも、作者 須らく化して一篇と爲すべし。故に必ず行文の法有り。開首の兩句は、便ち題目を將^もって破開するを要す。是れ「破題」と謂う。反破・正破・順破・逆破・明破・暗破・分破・總破の別有り。[題目として出題されていない]上[の部分]に連なる可からず、[題目として出題されていない]下[の部分]を犯す可からず。緊要の字を將^もって漏去す可からず、題目の字の全行を將^もって寫出す可からず。或いは上句も

て章旨・節旨を領し、下句もて本題を破くあり。或いは上句もて本題を破き、下句もて章旨・節旨に跟（したが）うあり。或いは上〔句〕 題字を破き、下〔句〕 題意を破くあり。或いは上〔句〕 題意を破き、下〔句〕 題字を破くあり。或いは先ず本題を破き、次に下文を吸（含ませる）するあり。或いは先ず下文を^{とお}透し、次に本題に扣（触れる）あり（『蒔花小築牖蒙草』不分卷・「作文程式」・一葉）。

出題文である題目は、僅かな文字であるが、一篇として理解すべきである。そのため、解答文である八股文は、規則がある。最初の二つの句は、題目を解き明かすことが求められる。だから「破題」という。解き方には、反破・正破・順破・逆破・明破・暗破・分破・總破がある。破題を書くにあたって、題目として出題されていない上の部分に言及すべきではない。また、題目として出題されていない下の部分に触れてはならない。題目の重要な文字を解き漏らしてはいけな。題目のすべてを書きだしてはいけな。また、上句で題目を含む章全体の意味や題目を含む一節全体の意味を含め、下句で題目の本題を解くものがある。上句で本題を解き、下句で題目を含む章全体の意味や題目を含む一節全体の意味にしたがうものがある。さらに、上句で題目の文字を解き、下句で題目の意味を解くものがある。上句で題目の意味を解き、下句で題目の文字を解くものがある。最初に、本題を解き、下句で出題されない後文（題目として出題されていない下の部分）を含ませるものがある。まず、出題されない後文（題目として出題されていない下の部分）を通して解き、下句で本題に触れるものがある。

また、虚字については、つぎのようにいう。

上句は歇語辭を用いず。惟だ「也」字のみ間ま或いは之を用う。下句の歇語は「也」字・「焉」字・「矣」字・「者也」・「者焉」・「者矣」・「而已」等の字を用う。「乎」・「哉」・「耶」・「歟」の若きは、俱に^{じずら}字面を翻開するに係る、
[そのため] 破題には用いず（『蒔花小築牖蒙草』不分卷・「作文程式」・一葉）。
上句では、虚字は用いない。ただし、「也」字のみは用いることもある。下句

の末尾の虚字には、「也」・「焉」・「矣」・「者也」・「者焉」・「者矣」・「而已」等の字を用いる。「乎」字・「哉」字・「耶」字・「歟」字は、字面をひろげることになるので、破題には用いない。

[用例]

題目：其爲人也孝弟（『論語』學而）

人各有爲孝，孝弟其首重焉（人 各々孝を爲す有り，孝弟は其れ首重なり）

[上句:] 先ず「人」を破く。^と[下句:] 次に「孝弟」を破く。是れ順なり。

正破にして，順破なり（『蒔花小築牖蒙草』不分卷・「破題」条・一葉）。

[題目：其爲人也孝弟（『論語』學而）]

不孝不弟，不可以爲人也（孝ならず弟ならざれば，以て人と爲る可からざるなり）

[上句:] 先ず「孝弟」を反にす。[下句:] 次に「爲人」を反にす。是れ逆なり。

反破にして，逆破なり（『蒔花小築牖蒙草』不分卷・「破題」条・一葉）。

題目：學而時習之（『論語』學而）

聖人勉學，與時俱進而已（聖人の勉め學ぶは，時と俱に進みしのみ）

[上句:] なし [下句:] 「習」字を暗破す。

「學」字・「時」字を明破し，「習」字を暗破す（『蒔花小築牖蒙草』不分卷・「破題」条・一葉）。

[題目：學而時習之（『論語』學而）]

習因乎時，功已瘁矣（習 時に因れば，功 已に瘁れるなり）

[上句:] なし [下句:] 「瘁」字は下の「説」字に對す。

上句は題面を破く。下〔句は〕意を破く。即ち下文の「説」字に對す（『蒔花小築牖蒙草』不分卷・「破題」条・一葉）。

題目：見賢思齊焉（『論語』里仁）

賢不易齊，見者宜思焉（賢は齊^{ひと}しくし易^{やす}からず，見る者 宜しく思うべし）

〔上句・下句：〕字字 拆開（分別）す。

分破なり。即ち拆字して破く（『蒔花小築牖蒙草』不分卷・「破題」条・一葉）。

〔題目：見賢思齊焉（『論語』里仁）〕

見賢者而不思，未可以言齊也（賢者を見て思わざれば，未だ以て齊^{ひと}しきを言う可からざるなり）

〔上句・下句：〕題面を反破す。

反破なり（『蒔花小築牖蒙草』不分卷・「破題」条・一葉）。

題目：達不離道（『孟子』盡心上）

達以行道，不可離也（達は道を行なうことを以てし，離るる可からざるなり）

〔上句・下句：〕字字 破開す。

明破なり（『蒔花小築牖蒙草』不分卷・「破題」条・一葉）。

〔題目：達不離道（『孟子』盡心上）〕

道爲土所貴，達亦不離而已（道は土の貴とぶ所と爲り，達も亦た離れざるのみ）

跟「土」字に跟（したが）いて明にし，跟上句に跟（したが）いて暗にす。

逆破なり（『蒔花小築牖蒙草』不分卷・「破題」条・一葉）。

（つづく）